

## 記号論

湊 吉正

最近における「記号論」の動向の一端を、私の狭い視野の中で触れることのできた五つの著書から探してみたい。

近現代における潮流としては、第一に、人文・社会・自然諸科学の間に広く浸透してきた記号論の流れがみとめられる。そしてそこにも、ソシュール(F.de Saussure)を祖とするセミオロジーの系譜に立つもの、パース(Ch.S.Peirce)に発するセミオティックスの系譜に立つもの、さらに、それら両者の融合系、もしくは関連系とみられるものがみとめられる。また第二には、数学基礎論に直結する記号論研究の流れがあげられる。

その第二の記号論研究の流れに立つものとして齋藤正彦『日本語から記号論へ』(日本評論社、2010年5月)をあげたい。日本語の表現から発して数学の基礎概念へと導くための入門書であるが、日本語のあいまいであると同時にニュアンスに富む表現を手がかりとして、明快に説明が進められていて、日本語の表現的特性を考える上でも参考になる。

先の第一の潮流におけるセミオロジーの系譜に属するロラン・バルト(R.Barthes)の『明るい部屋—写真についての覚書—』(1980<花輪光記、みすず書房、1985年6月>)をめぐり、青弓社編集部編『『明るい部屋』の秘密—ロラン・バルトと写真の彼方へ—』(青弓社、2008年8月)と、荒金直人『写真の存在論—ロラン・バルト『明るい部屋』の思想』(慶應義塾大学出版会、2009年10月)の2冊が刊行さ

れている。前者は12人の研究者それぞれの立場からの切れ味鋭い論説の集成、後者は著者による丹念な解説・分析。写真をめぐる演劇性、時間性、ストウディウム(観る人の文化的一般的関心)とプンクトウム(観る人の心に突刺さる要素)などについて掘り下げている。

米盛裕二『アブダクション』(勁草書房、2007年9月)は、先の第一の潮流におけるセミオティックスの系譜に属する。著者は、パースの提唱した推論に関する「演繹・帰納・アブダクション」の三分法に即しつつ、そのアブダクションが骨格を形成している「探究の論理学」が一般の「論証の論理学」といかに性格を異にしているか、さらに、アブダクションが創造的思考、科学的発見にいかにか重要な役割を演じてきたかについて解明している。論理的な文章のみならず詩的表現などについて考える上にも役立つものであろう。

田中久美子『記号と再帰』(東京大学出版会、2010年6月)は、先の第一の潮流における両系譜の融合系に属する。人間の自然言語の記号論と人工のプログラミング言語の記号論との統合を目指したスケールの大きな試み。例えば、記号の構成要素に関する用語として、ソシュール(シニフィアン—シニフィエ—全体論的価値)・パース(表意体—直接対象—解釈項)に対応させて著者(指示子—内容—使用)を設定している点、さらに、著者が深く検討している記号の「再帰性」の課題も、セミオロジーの系譜の中で言語記号の「反復性」「再認性」として説明されてきたものと通底するところが見いだされる点などにも、関心をひかれる。

(筑波大学名誉教授)